<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>メガラ学派のκυριευόν λόγοςに就いて</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>山内 得立</td>
</tr>
<tr>
<td>印刷物名</td>
<td>一橋論叢 第3巻 第2号</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年月日</td>
<td>1939-02-01</td>
</tr>
<tr>
<td>型式</td>
<td>部門別発行論文</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15057/5242">http://doi.org/10.15057/5242</a></td>
</tr>
<tr>
<td>©</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
メガラ学派

メガラ学派は周知の如くソクラテス以後のギリシア哲学においてその位置を占める学派であるが、近時人々によって特に注意をひかかるようになったのは恐らく次の諸点にその理由をもってるのであると思う。

一、メガラ派はセンス学の思想をうけて存在を一と見る。即、運動を否定するのであるが、この存在を単に理論的に一とし、存するにすぎないと、或時はそれは全観通りとさばれば、或は神と称し精神と名づけられるか、それは一であって、それに対する何物も存在しない。

存在を一として考へることをパルメヌデスに始まり、プラトノトニニ等に至るギリシア思想の主軸をなすものであるが、一者を特に善なるものとして存択することとは何か、何人によって始められたものであるか、それは勿論ソクラテスに於てであり、プラトンに於ても善のイデアが中心の意義を有する事は種々にも明白であるが、しかしプラ
以上のことから見ると、「アリストテレスの概念」はメガラ学派の思想を極めて密接な関係をもっており、あるいは、なぜならメガラ派の思想は「アリストテレスの概念」と同様の視点に基づいており、それが考えられるなら、そのメガラ派の思想が考えられるはずである。なぜなら、それが考えられるなら、そのメガラ派の思想が考えられるはずである。なぜなら、それが考えられるなら、そのメガラ派の思想が考えられるはずである。
仮に、ある可能性の地盤を未来に置くことは同時に、それを実現から引き離すことを意味する。それが可能であると仮に考えると、それはその可能性が実現しないことを意味しなければならない。AはBであり得るものであり、CもDであり得るものである。その実現によって、EはFであり得るものである。FはGであり得るものである。

仮に、ある可能性の地盤を未来に置くことは同時に、それを実現から引き離すことを意味する。それが可能であると仮に考えると、それはその可能性が実現しないことを意味しなければならない。AはBであり得るものであり、CもDであり得るものである。その実現によって、EはFであり得るものである。FはGであり得るものである。

仮に、ある可能性の地盤を未来に置くことは同時に、それを実現から引き離すことを意味する。それが可能であると仮に考えると、それはその可能性が実現しないことを意味しなければならない。AはBであり得るものであり、CもDであり得るものである。その実現によって、EはFであり得るものである。FはGであり得るものである。
この第二の意味においては、発生させられるものがなることも明かであるであろう。所詮可能性とはそれが絶対的に存在しない存在であるというものである。ディオドロスの第二のテーゼはこのことを意味することができる。物理的な存在であるもの、存在するものを知ることができることは逆に可能である。可能性は存在するもの、或るものは存在しない。このことはデモストネレスに於てもそうであったがメガラ学派に於ては明かである。即ち可能性から不可能なものは存在しない。即ち可能性から不可能なものは存在しない。物理的な存在を知ることができるが逆に可能性から物理的な存在を知ることができるものである。ディオドロスの第二のテーゼはこのことを意味することができる。